

史料紹介

田中首相・ヒース首相会谈録——一九七二年九月一八、一九日

服部 龍二

一九七二年九月一六日から一九日にかけて、イギリスのエドワード・ヒース首相が来日した。イギリス首相の来日は史上初である。ヒースは日光を見物後に田中角栄首相、大平正芳外相と個別に会谈し、通商関係、通貨、発展途上国への援助、アジア情勢などについて広範に意見を交わした。

また、ヒースは前年に訪英していた昭和天皇と再会したほか、経団連などが主催する午餐会にも出席し、日本の輸入拡大を訴えている。ヒース来日前の日英年次貿易交渉では、貿易拡大のために家庭用陶磁器四品目の対英輸出自主規制を撤廃することで合意され、イギリスへの輸出自主規制品目は三二品目に減らされていた。⁽¹⁾

このころイギリスは、ECへの加盟に備えていた。ヒースの保守党政権は一九七〇年六月一九日に成立すると、EC加盟に向けた交渉をヨーロッパで進めており、加盟条約が一九七三年一月一日に発効することになっていた。イギリスのほか、アイルランド、デンマークがECに加わり、拡大ECは九カ国で構成される。

このため田中・ヒース会谈では、ECや通商について多く議論され

た。イギリス首相の初来日であり、内容豊富な田中・ヒース会谈だが、日中国交正常化の陰となり注目されてこなかった感がある。ヒース来日は日中国交正常化に向けた田中訪中の九日前であり、椎名悦三郎特使の台湾訪問と重なっていた。当時の新聞はヒース来日よりも、椎名訪台に多く紙幅を割いている。

そこで本稿では、外務省外交史料館所蔵「ヒース英国首相訪日（公賓）」二〇一四―一七三六から、九月一八、一九日の田中・ヒース会谈録を紹介したい。会谈録によると、田中は「保護主義の傾向を抑え、貿易の拡大均衡をはからねばならぬことは、お互いに十分わきままえてあることと思う」、「英のEC加入を歓迎するとともに、大きな期待を寄せている」などと語った。

田中は拡大均衡を意図しており、「縮少^(マク)均衡により問題を回避するということとはよくない。貿易の自由化、関税引下げ、資本自由化をすすめることにより問題に対処すべきである。わが国の貿易自由化はヨーロッパ先進国とほぼ同じレベルに達したが、さらに自由化をすすめるため外国から物を買うことにより貿易バランスをはかるようにしたい」

と論じたのである。

輸入拡大を求めるヒースに対して、田中が「スコッチ・ウイスキーを飲み英国製の生地で作った洋服を着ることは日本男性の夢である。この夢が実現できるようにしたい。それは自民党の政策でもある」と返答したことは象徴的であろう。

アジア情勢については、日中国交正常化が最大の論点であった。田中は中国訪問を目前に控えており、「両首脳は対中関係についても率直に協議している。田中は、「中共が台湾を武力解放するようなことはない」とみられる」、「毛沢東が健在な中に正常化を行なう方が、周恩来一人でやるよりもやりやすいと考え、日本の内閣が変わった機会をとらえたものでしょう」と述べた。

そのほか、日米関係、北方領土、朝鮮半島、日本の国連常任理事国入り問題、航空機なども議題となっている。

原文は鉛筆とペン書きが混在する横書きであり、清書は確認できていない。促音については大文字と小文字が混在しているものの、本稿では小文字で統一する。一カ所だけの非公刊箇所は■と表記した。用字用語や数字に関しては原文のままにしてあり、「難かしい」「難しい」などは統一しない。

田中総理とヒース首相の会談

欧亜局西欧第二課

昭和47年9月20日

田中総理大臣とヒース首相は9月18日午前及び9月19日午後の2回にわたり総理官邸において会談されたところ、会談の様次のとおり。

出席者

日本側

英側

田中総理

ヒース首相

二階堂官房長官

ウォーナー駐日大使

森駐英大使

アームストロング首席秘書官

鶴見外務審議官

メートランド秘書官

大和田欧亜局長

ウィルフォード外務省次官補

木内総理秘書官

ブリッジス秘書官

門田西欧二課長 (記録)

ポップルウェル書記官 (在日大使館)

宇川北米二課長 (通訳)

9月18日 (午前10時～12時30分)

田中総理…1昨日、御到着の際はあいにくの雨で残念でした。昨

日はよい天気になりましたが、日光はいかがでしたか。

ヒース首相…大変楽しい旅行でした。日本側関係者のゆきとどいた準備のおかげで、短時間でしたがまことに有意義な半日を過しました。日光東照宮で、平和な、静かな雰囲気にとどまることができ、心安まる思いがしました。

田中総理…日英間には古くから友好親善な関係がありますが、今回、はじめて英国首相の来訪を得たことを大変喜ばしく思います。今回の会談が有意義なものになることを希望します。

ヒース首相…総理大臣閣下はじめ各位の温かい歓迎に接し心からお礼申し上げます。英国の首相としてははじめて日本を訪問したことを誇りに思います。と同時に、過去歴代の首相が何故日本を訪れなかったのか理解に苦しんでいます。

田中総理…宮中であらためて御礼を述べますが、この機会を利用して、昨年、陛下が貴国を御訪問の際に寄せられた数々の御配慮に対し、国民一同に代り、心から感謝の意を表します。

ヒース首相…陛下をロンドンにお迎えすることができ本当に嬉しく思いました。陛下とお話する機会を得ましたが、50年ぶりでロンドンを訪れたことを大変喜んでおられたようにお見受けしました。陛下が、はじめての御外遊に際し、

英国を公式に御訪問下さいましたことはわれわれ英国国民にとり大変名誉なことでありました。

田中総理…日英の関係は長いものがあります。この関係は戦争で中断され、アジア等において戦争のシコリが残ったのもやむを得ないことでしたが、両陛下の英国御訪問により両国間の友好関係が一段と高まることになったのは喜ばしい限りです。

ヒース首相…すでに外相レベルでの定期協議が毎年開催されているが、今回の私の訪日を契機に、両国政府間の交流が一段とすすむことを希望する。ヒューム外相は、今年2月定期協議のため訪日する予定であったが、国会の都合上中止せざるを得なくなった。同外相はこの点非常に残念がっていたのでお伝えする。

今回の訪日は、国際的な関係からもまた日英両国間の関係からも非常に時宜を得たものであったと思う。それは、両国ともに、世界の動きないしは変革に深い関心をもっているからである。自分は約2年半前に首相になったばかりであり、又貴総理におかれても御就任後まもないことでもあるので、今後長い期間にわたりわれわれは現職にあつておつき合ひできるものと思うが、この期間は世界的にいろいろ変革がみられる時期になると思う。自分が首相として心がけてきたことは英国をいかにしてヨーロッパの中に入

れるかということであり、これは英国の歴史の変革を意味するものである。

ECと日本の関係は今後ますます重要になると思うが、英はECに参加するにあたり、日・EC間の良好な関係を作るため寄与したいと考えている。

貴首相におかれては、中共との新しい関係の樹立あるいはソ連との関係の改善などに精力的にとり組んでおられることを承っている。英国は1950年に中共を承認し、最近、正式に大使の交換を行うに至った。中共は、統合されたヨーロッパがソ連に対し与える影響に着目し、この観点からECに大きな興味をもっている。又、中共は拡大ECにおいて英国が占める役割を評価し、この意味でも英・中関係を重視しているようである。

英国は産業革命を遂げた最初の国であり、最近では社会福祉の面で進展をみせている。又環境の面でも産業による自然破壊を防ぐため努力し、成果を挙げている。他方、産業の現代合理化をすすめているが生産性の向上に伴ない人員整理が行われ、失業問題が生じており、これは仲々つらい変革である。

日本は過去25年間驚異的な経済成長と繁栄を達成したが、その最高責任者になられた貴総理におかれては、最近産業の再編成及び環境対策に大きな関心払っておられると

承っている。日英両国とも、まことに興味の多い時期にさしかかっているが、同時にそれは政治家にとり危険を伴う時期でもある。

われわれはすでに変革の時代に入っている。

バミュエダでも云ったことであるが、この時代において重要なことは米、拡大EC及び日本が共通の使命達成のため協力することである。すなわち、(イ) 3地域が世界平和の維持に強い関心を示し、(ロ) 世界平和維持のために米が払っている努力に対しEC及び日本が理解と協力を示し、そして(ハ) 3地域が、世界的な貿易拡大を推進し、安定した国際通貨及び貿易の関係を確保することである。かりそめにもこれら3地域間に対立や摩擦が生ずる場合には、ひとり3地域のみならず低開発国をも含めた自由世界にとり不幸な事態が生ずる。

今回の会談は、そのような対立ないし摩擦を防止する上できわめて重要な役割をもつものと考ええる。

田中総理・日本、拡大EC及び米は相互に緊密な連絡を保たねばならぬ。これら諸国が平和維持に貢献することはとりもなおさずそれぞれの共通の利益に合致することである。

首相が云われたように、保護主義の傾向を抑え、貿易の拡大均衡をはからねばならぬことは、お互いに十分わきまえていることと思う。第二次大戦後つづいてきたドル、ポ

ンドを中心としたIMF、GATT、OECD体制は今や一つの転換期を迎えるに至っているが、同様の体制が必要という考え方には米、英ともに異論はないことと思う。われわれはこのような体制を守るため協力しなければならぬ。

この意味で、米及び日本は、英のEC加入を歓迎するとともに、大きな期待を寄せている。英の加入により、ヨーロッパだけが固まろうとする動きがチェックされ、又新しい国際ラウンドを推進する上で英が貴重な役割を果されむことを期待する。ホノルルでの会談でもニクソン大統領から日本、拡大EC、米の三国相互間の連絡を密にし友好関係を強化することの必要性が強調され、われわれはこれがため努力するよう話し合った。

ヒース首相・拡大ECメンバーの多数は世界貿易の拡大をはかることを希望している。英連邦31ヶ国のうち29ヶ国は拡大ECと関係をもつことになるし、又拡大ECが連合関係に入る域外国は40ヶ国にのぼることからしても、拡大ECは必然的に開放的にならざるを得ない。他方、最近では1ヶ国の力だけでは到底かなわないようなプロジェクトが増えている。例えばコンピューターについてみれば、英、仏、独のいずれをとっても、技術面及び商業採算の面で米に太刀打ちができない。コンコルドの開発においても、英国だ

けでは負担が大きすぎたので仏と協力した。

もしヨーロッパ全体が協力してコンコルドの開発にあつたのならばきつとより良い結果が出ていたであろう。

田中総理・英国では、都市集中を緩和するため25年前からニュー・タウン法を作られているが、わが国は1/4世紀遅れた今日、日本列島改造論を検討しているところで、この点英国は先輩である。社会保障、福祉、環境の面でも日本は英国に比し遅れているが、この分野でわれわれは大きな努力を傾注してゆくつもりである。ヒース首相は2年余前に54才で、首相になられ、自分も今年54才で首相になったが、首相としてはヒース首相が2年ほど先輩である。自分は近く中共を訪問しようとしているが、中共との関係ではわが国は英国に20年余遅れている。貴国は北京に代理大使を置きながら同時に台湾に領事館を置いていたが、日本も之を見做つてはとの意見がわが党内にもある。

いずれにせよ、ヒース首相が日本を訪問された機会に、かつての日英間にみられたものよりもなお一層緊密な関係を築き上げるようにしたい。

貴首相は到着後すでに2日間宿泊されているのでお分りのことと思うが、英国大使館は皇居にもっとも近い所に位置しており、これは明治時代の日英間の良き関係を象徴す

るものに他ならない。

ヒース首相・日英関係の緊密化はもとよりわれわれも望むところであり、今後田中総理との間に直接に率直な意見交換ができてることを期待している。

拡大ECについてさらに一言したいのは、経済的にみてヨーロッパは他の地域に比しより組織化されやすい性格をもっており、このことが拡大ECの形成を可能ならしめているということである。拡大ECは決して保護主義の擁護者ではない。

過去25年間の世界貿易の実績をみると、原材料生産国と工業国との間の貿易の伸びはさほどではなく、むしろ工業国間の貿易の伸びが大きかった。

農業保護問題はヨーロッパと米の間におけるもつとも重要な貿易上の問題である。米はECの農業政策を保護色の強いものとして批判しているが、英には効率的な農業生産が存するし又他のヨーロッパでもこれから近代化をすすめることになっているので、この点米と率直に話し合いたいと考えている。問題は域内農業を保護するためのメカニズムではなく価格にあると思う。価格水準が高いと生産を刺激し余剰を生じ、その結果貿易のパターンを崩すからである。次期国際ラウンドでは価格水準につき話合うことが必要である。日本でも米価の論議が盛んであると承知する

田中総理・わが国において、一次産品のGNPに占める比重は、

が、英国の関心は食糧品の価格を低い水準に押えることである。

今から百年前の明治初年では90%であったが、今日では16%にまで下がっている。しかし、米においては4%、ECにおいては6%の低水準にあり、6%のECが4%の米から攻撃を受けるとすれば、16%の日本はどのような強い圧力を米から受けているか容易に想像いただけるものと思う。米の農産物の価格はおおむね日本の農産物の価格の半分である。したがって、これから1985年までの間に10%位まで引下げることをもくろんでいるが、これはかなり難かしい問題である。公害、環境対策の観点から産業の地方分散化をすすめたいと考えているが、これも^(マ)仲々難かしい問題である。

コンコルドが米のSSTより早く完成したことに感銘を受けている。(之に対し、ヒース首相より、米はまだまだ着手すらしていないと笑いながら発言。)

米のIBMが全世界を独占することは良くないことと思う。日本でも、3年計画で、たとえIBMと同等の製品はできないにせよ、一級品と二級品との中間程度のものを作りたいと考えている。日本で使用されているコンピューターの49%は米国製である。

このような具体的な問題もさることながら、それにもましてわれわれは英国が拡大ECに加入して、大きな流れを良い方向に向けてくれることを希望する。英国がその伝統的な自由貿易の立場を堅持して拡大ECの指導的勢力になることがわれわれにとり最大の関心事である。

経済、技術の面で最高水準をゆくECが、均衡論で固まるということは是非とも避けなければならぬ。とくに、ソ連や中共の状況を考えると、なおさら重要な問題である。

ヒース首相・ヨーロッパにつきもう一言申し述べたい。それは政治の面についてである。ヨーロッパの国は1ヶ国ではダメであるが連合されたヨーロッパとして行動するときにはかなりの政治的影響力を発揮することができる。連合ヨーロッパを作り上げるためには時間がかかるであろうが、これが形成されたあかつきには、もはやヨーロッパ諸国は経済面に対立しているわけにはゆかなくなるであろう。

たとえば中東においては、ヨーロッパが一つの単位として行動することにより政治的影響力を及ぼすことができる。同様に、日本がその経済力と人口を背景に太平洋その他の地域で影響力をもつことは当然であろう。

4週間後に拡大ECの首脳会談が開催されるが、その際、産業、通貨、貿易政策等についての今回の会談の成果を反映させたい。

ヒース首相・中共との関係をどのようにみておられるのか、承ることができれば幸いである。

田中総理・日中関係には、この百年間、明治、大正、昭和の三代を通じ大きな問題があり、戦争がおきた。戦後、台湾問題をめぐり日・中関係は難かしい状態にあったが、最近国論が日中国交正常化の方向にすすんでいるので、近く中共に赴き正常化への努力をしたいと考えている。英国にくらべ20年ほど遅れているが、中共の方に切替えざるを得ない状態である。

北京との貿易は往復で年間9〜10億ドル、台湾との貿易は10〜13億ドルである。戦後1／4世紀を経た今日では、日本国内の世論調査では60%以上が北京との国交回復を望んでいる。台湾問題については、台湾がかつてわが国の領土であったこともあり地理的、歴史的に深い関係にあり、他方米も台湾と関係をもっているので、日・米・台三者の間で話しをしてきている。

台湾の蔣政権が、第二次大戦後、好意的に配慮してくれたことはすべての日本人がよく知っている。同時に、日本が北京と国交を開くことにより、台湾が危険におちいるようなことがないことも知っている。

朝鮮半島、ヴェトナム17度線、ベルリンの壁といったような東西の接点を守り極東に対する脅威をなくするた

めには、中共と国交を回復することが必要と考える。

朝鮮半島の背後には中共とソ連との二つがあり、この脅威をわれわれは常にかけている。中共との関係を正常化する事は極東の平和にとり不可欠のものと国民は感じている。

日本と米の貿易量は往復で113億ドルであり、日・ソは9億ドル、日・韓は10億ドル、日・中は9～10億ドル、日・台は10～13億ドルである。この統計からも明らかのように、われわれは日・中間の国交回復により経済的にどうしようという意図をもっているわけではない。日・中間の交流は、二千年の歴史をもつものであり、これをせき止めることはできない。まさに復交の時期は到来した。ニクソン大統領の北京訪問とモスコウ訪問の結果、ヴェトナム問題の見とおしがついたように、極東の安全を確保するためには中共との間にパイプを作っておく必要がある。

英国としてもスエズ以东から撤退するという事でなく、極東、アジア地域に対するその影響力にかんがみ、米が平和維持に貢献しているように、アジア地域における英軍駐留を確保して欲しい。とくにアジアにおいては、英国は日本や米とは違った意味での歴史的な影響力をもっている。

ヒース首相：中共に関する日本の立場を説明していただき感謝する。

東南アジア地域について述べたい。

労働党はシンガポール、マレーシアから撤退することを決めたが、自分はこれら諸国が英軍の駐留を希望するかぎり撤退すべきではないとの考えである。そこで、豪、ニュージラランド、シンガポール、マレーシアと取極をむすび英軍を駐留させているが、これは同地域における不安定な勢力を防遏する上で有効である。これは、同地域における米、独、日本の貿易、投資面での活動に役立っている。

田中総理：それは大変結構なことだ。

ヒース首相：先刻、田中総理は中共とパイプをもつことは極東の安全に役立つといわれたが、朝鮮半島の統一についての見とおし、及び統一が達成された場合、中共又はソ連のいずれが統一された朝鮮に対し大きな影響力をもつかにつき、御意見をうかがいたい。

田中総理：朝鮮の人民は優秀な民族である。優秀な民族が二つに分れた場合之を一本化することは仲々容易なことでない。北鮮及び韓国の双方が歩み寄りをみせているのは、後方にある勢力が少し力をぬいていることによるものと思う。南北間の話し合いを歓迎する。しかし、南北の統一は非常に難しく、かりに実現するとしても東西両独の場合よりも難かしいのではないかと思う。朝鮮事変勃発当時においては、

北鮮は兵員は中共より、兵器はソ連より、それぞれ援助を仰いでいた。現在、北鮮は、ソ連及び中共との間に一線を劃しているが、兵器はソ連のものをを用いている。

ヒース首相…日・中関係が正常化し、南北両鮮間に友好関係ができる場合、日本の北鮮向け貿易量が増えることになると思うが、南鮮の方が豊かではないのか。

田中首相…農村地帯では、南の方が民度が低い。北鮮では住宅も提供され、耕地整理も行われている。南の農村地帯における生産性、生活水準が北の水準をこえるようになるまでは、南北の統一はできないのではなからうか。北の人口は1、300～1、400万人程度であるが、北鮮には石炭、鉄鉱石等の鉱産物があり、バター貿易の対象になり得る産物がある。ちょうど米のように北にくらべ南では一次産品の比率が高い。人口の比率は南が2で北が1であるが、航空機の数では1・2である。米軍が駐留しているから平和が保たれているとよいてよいと思う。

ヒース首相…もう少し北京と台湾につきうかがいたい。総理は日中外交が正常化しても台湾は危険な影響を受けることはなからうと云われたが、それは米のプレゼンスがあるから、つまり米が台湾との取極を維持するからなのか。

田中総理…中共が台湾を武力解放するようなことはないとみられる点も見逃してはならない。中共の国内には問題が山積し

ているからである。米・台取極を守るといふことと、中共の国内事情の双方の理由から、台湾が危険にさらされるようなことはないと思う。台湾では現在、大佐級までの軍人は本島人が多くなっており、又台湾と中共の国民所得の比率は4・1で台湾の方が高いので、中共としても容易に台湾の武力解放はなし得ないだろう。

ヒース首相…さきに中東に少し触れたが、石油問題などの問題があり、この面でも米、E.C、日本の協力が必要と考える。

田中総理…ニクソン大統領と話したときも、石油開発は米資本だけがやるということではなく、時には米資本が主たる部分を、時には日本資本が主たる部分を受けもつというかたちで、日米双方が協力することが望ましいということであった。大きなプロジェクトの場合には合弁事業にする方が安全性でも経済性でもまさると思う。一例として、アブ・ダビの問題があり、日本商社は■■■と話しているようだが、話がまとまれば政府も之に協力してゆきたい。

ヒース首相…石油に関する最大問題は、今後とも先進国資本がメージャーとして認められるかどうかである。イラン国王は最近コンソーシヤムにつき理解を示しているようだが、リアに刺戟され、生産国の間には生産は生産国だけがやり、先進国は消費面だけを受けもつべきであるといった動きが見られる点注意を要する。英国ではエネルギー供給問

題につき研究しているが、今後20年間、エネルギー源の供給をいかに確保するかは西欧諸国にとり重要な問題である。米もここ7～10年間で供給不足に当面するのではない。英国は安定した供給を確保するため、一方ではBPがやっているアラスカ、北海での石油開発に力をいれるとともに、他方供給源の多角化をはかるため核エネルギーの利用と石炭の利用について研究をすすめている。きたる拡大E.C首脳会談ではとり上げるつもりはないが、英国としては拡大E.Cがエネルギー供給問題につき高い優先度を与えることを望んでいる。E.C、米、日本は、エネルギー問題にいかにとり組むべきかにつき協力して考える必要がある。とくに、アラブ、アフリカ、ラ米地域の石油生産国の動きには注意する必要がある。独禁法との関係でBPの場合政府出資率は49%であり、役員会には政府が指名した役員2名を送りこんでいるが、発言しないことにしている。しかし、政府としてもっと積極的に石油問題にとり組むべき時期が来ていると思う。油の価格が上がれば生活費が上り、生活費が上がれば政府は国民の支持を失ないわれわれの得票が減ることになるからである。

田中総理…業界間で話が満足にすすんでいるものについては、政府も協力してゆきたい。

ヒース首相…ソ連が日本に対し石油供給をするという話を聞いたが、

これは真面目な話であるのか、又これは安定した供給源として考えられるものかどうか、日・ソ間に問題が生じたとき供給が絶えるようなことはないか。

田中総理…チュメニからイルクーツクを経てナホトカまでパイプラインをひくプロジェクトがある。その事業費は30億ドル、うち10億ドルを日本が受けもつというものである。5、6年後から始まり20年間、年間2、500～4、000キロ・リットルの石油を日本に供給する計画で、この場合日本の石油消費量の5～10%を供給することになる。さきに調査団を派遣して現地視察をさせ、今その報告を検討している。この検討は米の業界も加えて行っている。ただ、中共がチュメニ油田開発問題につき大きな関心をもっている点念頭におく必要がある。アメリカに一枚かませるのは、ソ連との関係を安定したものにしておこうという意味である。又供給量もわが国の消費量の10%以下であり、場合によっては5%以下になるかもしれぬ程度のものである。

ヒース首相…中共は日・ソ共同事業に反対しているという意味か。

この問題は日中間の交渉の対象になると思うか。

田中首相…交渉の対象になるということではない。しかし、中・ソ国境線には両国の兵力が対峙しているが、パイプラインが完成すればソ連としてこの兵力に油を供給することが容

易になるので、この点を中共側はかなり気にしているようだ。パイプの延長は7、200キロメートルに及ぶものがある。

ヒース首相…ソ連との平和条約交渉―北方領土―の見とおしについて伺いたい。

田中総理…グロムイコ外相が1月に来訪し、今秋から条約交渉をはじめようということになっている。交渉がまとまるためには、4つの島が返ってくるのが絶対要件である。15、6年前の日ソ交渉の際、先方は4つのうち2つを返すということだったが、わが方は4つでなければ絶対に応じないと頑張ったため条約は結ばれなかった。このわが方の態度は今日でもまったく変わっていない。日露戦争の際割譲を受けた南樺太、千島はすでにソ連に返還した。4島は面積で沖縄の2倍であるが、これらの島が帰ってこなければ国民は到底納得しない。

ヒース首相…他に日・ソ両国間にどのような問題があるのだろうか。
田中総理…シベリア開発、沿岸州^{（海カ）}港湾の建設、銅、粘結炭等の開発プロジェクト7ヶ、総額約35億ドルの事業計画がある。このうち港湾建設などすでに完成したものがあがる。関心が大きいの、地下資源及びシベリア開発である。パルプ材などは長期契約になっているが、鉄道、港湾設備の開発とパッケージになっている。

ヒース首相…豪州との長期契約の場合も之と同様に鉄道、港湾開発がパッケージになっていると諒解してよいか。

田中総理…豪の鉄鉱石の長期契約についてはおおむねその通りである。シベリアの天然ガスの開発については米と協力したい。

原材料になる資源については、シベリア、インドネシア等の東南アジア、豪州、ペルー、アラスカ、カナダなどの太平洋周辺を中心に長期的な供給計画を樹てないと安定した供給を確保することが難かしくなる。今後は加工された原材料の輸入が増えていくことになる。それは供給国の収益を増やすに役立つし、又わが国における公害の軽減にも役立つであろう。

田中総理…先般ホルルル会談の際、ニクソン大統領に話した問題だが、日本の国連安保理常任理事国就任問題につき首相のお考えを承りたい。

ヒース首相…日本としてはどのように考えておられるのか。
田中総理…日本は新憲法を制定し軍備をもたないことにし、又国際紛争を武力で解決しないことにした。しかし、世界平和のため経済、民生安定の面で種々協力しなければならぬと考えている。この意味で、もし安保理常任理事国になれるのなら、それなりに貢献をしたい。

ヒース首相…常任理事国就任に関する日本の希望については、英国

は之をよく理解しかつ認識している。又、安保理が設立されて以来いろいろな発展や変化があったことも十分承知している。日本がアジア諸国により選出されたメンバーとして安保理で活躍しておられることも評価している。しかし本件に関して次の三つの問題を指摘したい。その第一は、憲章改正に同意した瞬間に安保理メンバーシップ以外の問題があれもこれもと出てくることの可能性である。次に、新たな常任理事国として日本以外の国を考える必要はないかどうかの問題である。つまりインドをどう考えるのか、ドイツ問題が解決した場合に西独をどう考えるのか、又、アジアやヨーロッパに新たに常任理事国が生れる場合にはアフリカ諸国は当然要求してくるものと思うが、このような要求にはどう応えるのかという問題である。さらに、拒否権の関係で北京及びモスコの諒解をとりつける必要があるが、国交正常化交渉あるいは平和条約交渉に際し、中共やソ連はこの問題を取引材料としてとり上げてくるのではないかという点である。北京やモスコが大変手強い交渉相手であることはすでに御承知のとおりである。

しかし、もし日本の積極的な協力により国際貿易及び国際通貨のインバランスを解決することができれば、日本の常任理事国の話をする上においてよい基盤ができるものと思ふ。このことは英についてはもとより米についても云え

ることと思う。

ヒース首相…この点に関連し、低開発国援助をいかに考えておられるか伺いたい。

低開発国は、開発についての方法について先進国の意見に同意しないきらいがある。低開発国はあまり効果のない部門に多額の金を注ぎこむことを欲している。資金援助は受けるが、開発事業には関係してもらいたくないという態度である。そこで英国としては、政府援助の大部分は教師や職業訓練のための要員の派遣に向けている。昨年、英国はGNPの1・03%を政府及び民間の援助のかたちで低開発国に与えたが、之は先進國中第2位であった。

田中総理…日本はGNPの1%を低開発国援助に向けることを目標としている。昨年は0・96%であったが、ほどなく1%を超えるものと思う。3年位の間経常収支の黒字をGNPの1%に押さえ、これを援助にふり向けたい。援助額は増えているが政府援助の部分が少ないので、70年代のできるだけ早い機会に0・7%まで政府援助を増やしたいと考えている。低開発国援助額はほぼ国防費に相当する額である。自衛隊を2つ作るということで国民の理解を得たいと考えている。

田中総理…拡大E.C首脳会談でどのような意見を述べられるの主要なポイントを伺いたい。又、明年1月1日にE.Cに加入

の際におけるポンドのポジションについて伺いたい。

ヒース首相：ポンドについては、知っておればお知らせするのだが、残念ながら承知しない。首脳会談は、今後10年間位にわたり、拡大ECの発展の方向づけをすることを狙いとするもので、3つの議題がある。第1は、域外諸国との関係はどうするかということで、（イ）アメリカ及び日本、（ロ）ソ連、中共、（ハ）低開発国の3つのカテゴリーに分けてとり上げる。

第2は、域内における経済、通貨の統合の問題である。一部の国、とくにポンド・ピドー大統領は通貨統合に強い関心をもっている。域内通貨の動きをコントロールするため中央基金の設置が検討されており、加盟国の関係や中央銀行総裁は、外貨準備の1部をプールして基金を運営する可能性につき話し合っている。英国としてはむしろ経済統合の問題を重視している。経済統合は、それ自体が重要であるのみならず、通貨統合の前提ともなり基礎にもなるものである。経済発展の面で不均衡が存する限り、拡大EC10ヶ国の蔵相が集まり為替レートを定めても無意味である。よって、英国としては地域開発の問題を提起している。農業面については例えば西独における農業の近代化及び生産性の向上が考えられるし、工業面については施設機械が老朽化し、あるいは雇用問題を生じている地域が考えら

れる。経済統合と通貨統合は並行して推進されねばならぬ。第3は、機構に関する取極で、議会や大臣会議をどうするかといった問題である。これは加盟国にとり重要な問題であるが域外国との関係ではそれ程でもない。英国にとっては議会の協力を得ることが問題である。英国議会は長い伝統をもっており、関係各大臣がどのような行動をとるかよくに議会の領分をおかさなないかの点でかなり神経質であるからである。

首脳会談においては、ECとして国際的通貨改革の問題をどうするのかにつき意見を固めるべきことを強調したい。米大統領選が終り次第通貨改革の面で相当の進展を見出し得るよう準備をしておく必要がある。ヨーロッパ諸国は短期的資本の移動により不当な影響を受けている。このことはマルク、ポンドの例に明らかであり、今年6月には投機筋の動きを封ずるため英国はいち早くフロートに踏みきった。通貨事情を不安定ならしめる他の要因として、600〜700億ドルの交換性のないドルがヨーロッパにダブっていることである。ポンド残高は30億ポンドほどあり、ポンド保持国と取極をむすびポンド安定をはからねばならないと考えているが、究極的には国際協調により解決するよりほかはないと思う。

田中総理：同感である。日本も大量のドルをかかえているので、

国際協力により通貨の安定をはかってゆきたい。

ヒース首相…通貨問題は重要なので明日の会談の際再びとり上げた
い。

英国はいち早く産業革命を遂げ19世紀には大量のサー
プラスをもった。その際、英国はこのサープラスをソ連、
ラ米、インド、豪州等の開発を目的とする海外投資にふり
向けた。英国は過去において、サープラス保持国として、
今の日本と同様の経験をもった。サープラスを処理する方
が、外貨不足に対処するよりも簡単だと思う。

田中首相…サープラスは、低開発国援助と日本列島改造のため使
いたいと思っている。

ヒース首相…今朝の会談は非常に有意義であった。明日も継続した
い。

第二回会談 18日午後(15時40分～16時30分)

田中総理…本日、首相が参内された皇居は戦災で焼けたものを新
らしく建て直したもので約10年前にできました。日本的
建物と庭園を見ていただいて結構でした。

ヒース首相…陛下より午餐を賜りまことに光栄でした。皇居は日本
的であると同時に近代的であり色彩に富み大変美しく、又
伝統的な庭園や森も美しかった。

田中総理…建物の中庭は、千年前の京都の様式をとり入れたもので
す。

ヒース首相…古いものと新しいものが美事に調和された皇居は本当
にすばらしいものです。しかしこのような調和をつくり出
すことは仲々難かしいことと思います。総理はこの官邸は
あまり好きでないと云われたが、その意味がやっと分りま
した。(昨日の会談のティー・ブレイクの際、田中総理は、
この官邸は40余年前、首相が内閣の議長の後を果してい
た当時に建造されたもので、首相の機能が大きくなつた今
日では能率が悪く不便であるとヒース首相に述べられた経
緯がある)。

田中首相…京都へ行かれると古いものと新しいものの調和が
もつとよく分ると思います。どうか又お出かけ下さい。

ヒース首相…昨日、通貨問題につき話しかけたままであったので、
まずこの問題を数分間とり上げ、ついで他の問題に移りた
いと思う。通貨問題について、いろいろな案が出ているが、
どれがよいかよく選別する必要がある。欧州では、通貨の
大量的な短期的移動により、自国の通貨が不当に危険にさ
らされている。不当に自国通貨が危険にさらされるという
意味は、例えば西独の場合、投機筋の迷惑により、マルク
の切上げに追いこまれ、又ポンドもECに入ることを予測

して切下げへの思惑がはたらき、英政府としてはフロート制への移行を余儀なくされたということである。日本も円につき同様の経験があることと思う。

一つの案は、決済に使用する場合には金価格を2〜3倍にひき上げるというものである。この案によればEC内に3つの金価格ができることになる。すなわち、IMF価格、ヨーロッパ価格、現実取引価格である。これは金をドルよりも魅力あらしめるもので、仏や伊のごとく金保有量の多い国にとり有利であるが、独や英には魅力はない。英はこの案に反対であり、現在この案は立ち消えになっている。

他の案は、資金の流入を規制するというものである。仏のように資金の流入が少ない国にとつては問題はないが、英国のようにロンドンに世界的金融市場がある国にとつてはこの案は困難である。独はその伝統的な立場からこのような規制措置には反対している。英国としてはロンドンを金融市場として残したい。なんらかの改革ができるまで、緊急措置として資金流入を規制することを考えてみるのも一案かと思う。

ヒース首相・国際的通貨改革に関連し、黒字国と赤字国との関係において現在の貿易制度をどう考えるべきであろうか。昨日午餐後、日本業界代表と話した際、黒字問題の解決案として日本の成長率を引下げるといふ意見があったが、自分は

この意見には賛成しない。世界各国とも成長を伸ばし生活水準の向上をはかるべきであり、このような意見は長期的な解決たり得ない。19世紀に、英国は黒字国として他の国の開発に貢献した。ラ米において鉄道、電力の開発を行い、ソ連の開発にも投資した。その結果、投資の一部は英国製機械の購入というかたちで英に還流されたが、大部分は現地調達に向けられた。当時は世界貿易は自由貿易の体制に支えられており、英は外国からいろいろな物を自由に輸入した。

自分は日本業界代表に対し、経済発展のスピードをおとすよりも、自由に物を買うという方向で問題の解決をはかることを示唆したところ、多くの代表は之に同意しつつも、輸入や外資の投資を妨げているのは業界ではなく政府であるとしていた。これは英国の実業界が常に云うことだが、田中総理・成長率を抑えるという考え方がそれが縮少均衡を意味するものではない。日本は過去17年間10%以上の成長をつづけてきた。

1954〜64年の10年間は10・4%、1960〜70年の10年間は11・1%であった。この成長率は少し高すぎるので年率7〜8・5%位に安定させたいと考えている。首相が指摘されたように、縮少均衡により問題を回避するといふことはよくない。貿易の自由化、関税引

下げ、資本自由化をすすめることにより問題に対処すべきである。わが国の貿易自由化はヨーロッパ先進国とほぼ同レベルに達したが、さらに自由化をすすめる外国から物を買ふことにより貿易バランスをはかるようにしたい。

数字を見ると昨年度における自動車の対英輸出は大きい。しかし、日英の貿易量は双方お互いにシェアが小さい。この6月にデービス大臣とも話したが、近視眼的にバランス問題をあまり気にしないようにして欲しい。わが国よりの対英輸出が多ければ英国よりの輸入を増やすという拡大均衡の方向をとってゆけばよい。

国際通貨問題について述べたい。1月1日に拡大ECに英国が加入したとき、EC諸国だけでまとまるということがあつては困る。英、米、独、仏、日を含め主要先進国が一つのグループとして話し合い協力してゆくことが必要である。昨年末の平価調整についても、いろいろの意見はあるが、あれを土台にしてIMF機構をどうするか、10ヶ国蔵相会議、SDRをどうするかといった問題をもっと研究し、IMF設立当時と同じ気持ちで「より良い体制を作らなければならない。黒字国も赤字国も同時に努力しなくてはならない。黒字国と赤字国だけで話すということではなしに、国際機関に加入している主要国が寄り集って検討し、よりバランスのある取極を考え出すべきである。

10年前にみられた仏や南阿のような金保有国ないし産金国としての意見には賛成できない。英、米、日、独が個々の問題に対し虚心坦懐に意見を述べ合うべきである。

ヒース首相…同感である。必要に応じ本件につき書簡で意見交換をしたいと思う。国際通貨改革ができるまでの暫定期間中にもECが通貨安定を必要とする理由は、ECの共通農業政策を効果的に運営したいからである。ECが考えている通貨改革は域内のみを対象とするものでなく、国際的通貨制度の改革である点を明らかにしておきたい。

貿易について田中総理が考えておられる政策を承わり満足に思っている。資本の自由化がすすむと通貨問題に関する日本の発言権は増大するであろう。ボール・ペアリング、ポリエステル・フィラメント、カラー・テレビの3品目につき進展がみられたことにつきデービス大臣は感謝の意を表していたことをお伝えしたい。

香港特惠について述べたい。香港は250万の中国よりの難民をかかえ問題が多い。香港は朝鮮、台湾に比し日本市場において不利な立場におかれているが、このような事態を改善して欲しい。(このとき、ウィルフォード次官補より本件につきコミュニケーション中で合意がみられた、日本はearly next yearのoverall reviewの際に例外リストを再検討することになっている旨をヒース首相に報告。両首脳

はコミュニケーションの合意を確認された）。

日本の自由化政策がすみ、日本の人々にバーボン並みの値段でスコッチ・ウイスキーを味っていたくことを希望する。又日本の冬は寒いと聞いているが、英国製の毛織物で服を作り暖をとっていたきたい。

田中総理…スコッチ・ウイスキーを飲み英国製の生地で作った洋服を着ることは日本男性の夢である。この夢が実現できるようにしたい。それは自民党の政策でもある。

ヒース首相…昨日の業界代表との話し合いの際日航社長にも云いましたが、コンコルドのエンジンはクリーン・エンジンであることを申し上げたい。同時に、自分にとり夜眠れぬほど心配な問題があるが、それは日・中間の国交が回復したのちにおいて中共が飛ばすコンコルドが日中間の旅客をとつてしまわないかということである。もし日航もコンコルドを発注されればこのような心配はなくなるであろう。

又、ロッキード1011はロールス・ロイスのエンジンを使用するので、同機を購入していただければ米を助けるのみならず英をも助けることになる。英国政府としては、ロールス・ロイスをバック・アップする用意がある。同社は新マネジメントの下で立ち直っており、政府より7、500万ドルを追加支出し、新エア・バスエンジンの開発に力めている。

ヒース首相…日本の安保理常任理事国就任問題について一言申述べたい。

昨日、自分は本件にまつわる種々の問題点を指摘した。しかし、ニクソン大統領が日英間で話すよう貴総理に示唆したといういきさつもあるようなので、この次自分がニクソン大統領に会う際、その時期は多分年末頃になろうが、同大統領と話してみることとしたい。英国としては positive attitude をとりたいと思っている。もし日本の積極的な協力により、貿易、通貨上の問題に起因する政治的困難が解消すれば英国として positive attitude をとりやすくなるであろう。

田中総理…この点、ニクソン大統領も、ヒース首相と話してみたいと云ってくれた。

ヒース首相…御都合がつき次第、貴総理をロンドンにお迎えしたい。

田中総理…いずれ政治日程をみて、正式に返事したい。

ヒース首相主催晩餐会における田中総理とヒース首相の会話

47. 9. 20

欧西二

9月19日夜英国大使公邸で行なわれたヒース首相主催晩餐会における田中総理とヒース首相の会話は主としてよもやま話であった

が、中国問題にもふれるところがあつたのでその模様(中国問題に関するところ)を通訳の記憶により下記のとおり書き留めた。

記

1. ヒース首相…最近の中国の急速な対日接近の動機をどう御覧になりますか。

田中総理…毛沢東が健在な中に正常化を行なう方が、周恩来一人でやるよりもやりやすいと考え、日本の内閣が変わった機会をとらえたものでしょう。

中国は、ソ連との間に国境問題をかゝえていて大変です。国境だけではなく、ソ連は、北ベトナムやバングラデッシュなどをも含めて中国を包囲しようとしています。

ヒース首相…総理のそのお考えによれば、毛沢東は周恩来の対日政策に賛成しているということになりますね。

田中総理…そうです。

2. ヒース首相…田中総理との会談で、総理が言われた、北京との国交樹立後台湾に総領事館をもつというやり方について、その後考えていたのですが、英国が北京と大使交換を行なった後台北の総領事館を閉鎖せざるを得ないことになった例もあり、むずかしいと思いますが……

田中総理…北京、台湾の双方が一つの中国論を譲らない限りむずかしいでしょう。

3. ヒース首相…北京は、日中国交樹立の交渉で日台平和条約の廃棄を求めて来ると思われますか。

田中総理…求めてくるとは思いません。また、求められても出来ることはありません。しかし、日台条約は、その使命を了れば消滅するでしょう。「後からつけ加えて」新らしい事態にとつて代られることによつて。

ヒース首相…それには通告(notice)を要しますか。

田中総理…必要ありません。日台は普段から接触していますから。椎名特使の派遣もそのために行なつたものです。

4. ヒース首相…台湾と取り引きをする日本の企業は北京とは取り引きできなくなり、北京と取り引きする企業は台湾とは取り引きできなくなるという事態になるのですか。

田中総理…「北京との関係で」以前はそういうことはありましたが、今ではそうではありません。

台湾もそういうことはしません。今、北京で日中回復にたずさわっている人は、皆、日本をよく知っている人です。周恩来は、2年間留学していたし、廖承志やその他の人々も昔日本で勉強したことがあります。台湾でも蔣介石は、日本の士官学校を出た人です。日本の40年にわたる台湾統治は台湾で高く評価されています。日本と台湾の関係は非常に深い。

〔5. ヒース首相…「笑いながら」今日の「外人」記者会見で日本と中

国が手を組んで世界を dominate するのではないかという
質問がありました。

田中総理…全く馬鹿げたことです。それはソ連と西独が手を結ぶ
というにも等しいことです。

ヒース首相…それこそまさしく英国が阻止しようと努力しているこ
とです。」

注

(1) 『朝日新聞』一九七二年九月一九日、外務省編『わが外交の近況』第一七
号（外務省、一九七三年）二〇一―二〇二、五〇一―五〇六頁。

（『日本外交文書』編纂委員）

